

[ピラミッドだより]

## 飼料添加物としてのコリスチン使用禁止後の 野外農場の状況について

下 山 安 (㈱サンエスブリーディング)

All about SWINE 53, 31-32

平成30年3月末日で硫酸コリスチンを添加した飼料は全て製造中止となり、農場での在庫も5月末には完全になくなったことになる。飼料メーカーはコリスチンに替わる添加物としてハーブ類やギ酸などの機能性原料と腸内細菌叢適正化に効果のある生菌剤等を組み合わせたもので対応しているところが多いようである。サンエス種豚ユーザー、畜産関係者に、その後の状況について聴取したが、現在のところコリスチンを抜いたことで新たに下痢が発生した、下痢が悪化した、発育の停滞あったなどの農場は見られてない。もうしばらく様子を見てみないと判断できないのが現状であろう。

そもそもコリスチン添加の目的は単に子豚の「成長促進効果」であったが、抗菌性としても「子豚の細菌性下痢対策」として期待されていたものである。しかし実際は養豚場での離乳前後の下痢の発生例は多く、コリスチンの添加がどれだけ効果があったのかは何ともいえない部分もある。下痢が発生する（繰り返す）農場もあれば、ほとんど症状がない農場などさまざまであり、環境の悪い農場においてはコリスチンが子豚の下痢を緩和し発育の手助けをしたかもしれないが、飼料に添加されているコリスチンのみで下痢対策をしてい

るわけではなく、何かしらの生菌剤や抗菌剤を別途添加しているケースがほとんどであろう。大切なことは個々の農場で飼養管理（母豚管理）、環境管理などを見直し、いかにコントロールするかであり、それらを農場全体のバランスを考えた上で生菌剤やグラム陰性菌対応の機能性原料などを選択し対応していくことであると思う。

今回聴取を行った農場の中には生菌剤や母豚へのサプリメントを強化している傾向が見られ、これは母豚の腸内細菌叢を安定させ、子豚の抵抗力を高めていく対策をとっているものと思われるが、一方で使用する抗菌剤の種類が増え、添加期間を長くしているようなケース（肺炎対策含め）もあり、抗菌剤についてはあらためて使用量や使用時期、国で認められていない抗菌剤を家畜へ使用しないなど、定められた基準に従い適正に使用することを生産者が意識しなければならないと感じた。

しかし飼料からコリスチンを抜いたことにより、大腸菌性の下痢（浮腫病含む）などを発生するケースも当然予測しなくてはならず、発生があった場合の早期対策については指導する立場にあるものがしっかり準備し、指導していなければならないと思う。

家畜において薬剤耐性菌（AMR）の出現，広がりを抑えることで食品を介してヒトへのAMRが広がることを防ぐこと，あわせて残留についても

意識し，基本的な飼養管理を見直すいい機会なのではないだろうか。